



海が森を育てる。
森が海を豊かにする。



和歌山県知事

仁坂吉伸

〈生き抜くための知恵は
伝統文化〉

和歌山県は8割が山、平地が少なく山からすぐに海に落ちていく地形だ。だから紀州人は積極的に海や山とつきあって生き抜いてきた。生き抜くための知恵は伝統文化となり、厳しい自然に対する畏敬と海山の恵みへの深い感謝の思いが生まれたのだ。和歌山の自然には有形無形の歴史文化が織り込まれていると、私は感じている。

(仁坂吉伸)

「和歌山から広がる海の文化」

仁坂 本日は和歌山県まで来ていただいてありがとうございます。和歌山県・太地町の捕鯨は長い歴史があり、日本の伝統捕鯨のルーツです。ニコルさんは太地と深い縁があり、今は森の再生にも取り組んでおられる。私はそこに大変関心をもっていましたので、お会いできるのを楽しみにしていました。

「和歌山には、海を介して世界の地域と交流した歴史がある」(仁坂吉伸)

ニコル 私は山から和歌山に入ったんじゃない、海から入ったんです。カナダの北極探検で捕鯨の世界に出会い、日本の捕鯨船にも乗りました。太地の人たちも乗っていました。彼らはとても印象的



彼らの知恵は受け継がれていかなければならない。自国の経済を考へても漁業や農業、林業といった第一次産業はいろんな意味でこれから重要になってくる。しかし和歌山でも、第一次産業の従事者人口減少、高齢化が進んでいるのは大変な問題だと思います。だから和歌山で生まれ、全国へ広がった「緑の雇用」に見られるように、県外からも若い人に呼びかけて担い手を育てるということを和歌山ではやってきました。これからは育った担い手が生計を立てていく状態にしなければなりません。また、漁師の担い手は必要だけでも、マグロに代表されるように海産物が無尽蔵にあるわけではありませぬ。どんどん厳しい状況になってきているのが現実です。そうなると思本町にある近大水産研究所で行われているように、卵からふ化した稚魚を育てる養殖技術で補っていく必要があるんです。

「私は山から和歌山に入ったんじゃない、海から入ったんです」(C.W.ニコル)

でした。不思議なのは、その後沖繩・海洋博でカナダ館の副館長を務めたのですが、そこに当時の太地町

それで僕は「あ、日本の捕鯨を昔くなら太地だ！」と、その場で決めましたね。

長が来たんです。捕鯨のことで話が合つて、帰りにお土産を渡ししました。カナダ先住民によるシャケを彫った黒い石の箱です。それを見て、彼は目頭を熱くしたんですね。明治11年、太地の鯨捕りたちが沖に流されて百十一人が死亡しました。彼のお祖父さんは生き残った一人だった。その事故以後、太地を離れカナダに渡つて、好きな川でシャケを獲つて暮らしていたというんです。彼はそこで生まれ、戦争があつたから帰国したんですね。

仁坂 太地の漁師さんたちもそうですけど、和歌山の、とくに沿岸の人たちは昔から生活を海に向こうへ求めるところがありますね。海を介して、いろんな世界の地域との交流が歴史的にありま

ニコル 太地の人が海に向こうへ出る理由には、もちろん人の性質もあると思うけれど、海を渡る船づくりにも理由があつたと思ひますよ。質の高い材木それから漆があつたんです。いい漆を塗っていた

作家

C.W.ニコル

から、船を壊すような虫を寄せつけない。世界に誇る優れた技術があつたんですね。

仁坂 捕鯨に漆塗りの船というのは、面白いですね。和歌山には16世紀後半まで根来寺という天主教都市が栄えていた。紀州根来寺には、根来塗りとされる素晴らしい漆塗りの技術が発達していた。その伝統技術は現在の輪島塗のルーツであり、県内では海南市の黒江塗りと受け継がれているんです。良質な紀州材と高い造船技術、さらに漆塗りの技術を融合させていたのだと想像すると、先人の創意工夫の力には脱帽しますね。



作家

プロフィール
1940年、英国ウェールズ生まれ。
カナダの環境保護局の環境問題緊急対策官等を経て、
1980年、長野県に帰住。
執筆活動と森の再生活動を続け
2002年財団法人「C.W.ニコル・アフアの森財団」を設立。

「森は心を育てる。
僕だつていつも
森に癒されてますよ」(C.W.ニコル)



「アフアの森」と「企業の森」
仁坂 和歌山では、「企業の森」というプロジェクトがあるんですけど、放置された伐採地を企業に借りていただいて、いろんな木を植えたり、手入れをしてもらうんです。企業の方々には、和歌山の自然を楽しんでもらう。町で暮している人には、森の中を歩くだけでも大変じゃないですか。頭と身体をしっかりと使わないといけない。それで心が生き生きしてくるんですよ。ニコルさんは「アフアの森」という森林再生活動のさがけといえるような財団を運営されていますね。
ニコル 僕は武道を学ぶために日本にきました。そして僕が一番驚いたのは、日本が本場に自然豊かな国だったことなんです。僕の故郷南ウェールズは炭鉱地だった。炭鉱で木は伐採され、山はぼた山に。川も汚染されていた。ウェールズの緑の面積は全体の5%。日本は70%ですよ！木の種類だつて多い。多様性のある自然なんです。日本で小説を書いて生活していた私に、南ウェールズで、森を復活させようという試みがされて、見事に森の再生に成功したという話を聞いたんです。故郷に戻って僕はびっくりしました。緑の割合が60%にまでなっている。それで僕は思った。失われつつある日本の森をよみがえらせようと。黒姫の土地を買って、森のエキスパートを雇って「アフアの森」という森林再生の取り組みを始めたんです。そのことが僕の人生に大きな影響を与えてくれました。社会に警察、医者が必要ないように、日本の森にはフォレスター(森林監督官)が必要だと思つた。
仁坂 そうかも知れませんが、「企業の森」の普段の整備は、遠くから頻繁に手入れに来るわけにもいかないし、そこはプロの森林組合に委託するわけです。そこで雇用が生まれる。県外からも若い人たちが受け入れて林業の担い手を育てていける。でもこれから必要なのは、育成された担い手が持続して林業を生業として生きていけるような仕組みづくりなんです。林業の振興のために、紀州材を使った商品の開発や流通など、いろいろなことに取り組んでいきたいと思つています。
ニコル 「アフアの森」では、ワン・



たんです。故郷に戻って僕はびっくりしました。緑の割合が60%にまでなっている。それで僕は思った。失われつつある日本の森をよみがえらせようと。黒姫の土地を買って、森のエキスパートを雇って「アフアの森」という森林再生の取り組みを始めたんです。そのことが僕の人生に大きな影響を与えてくれました。社会に警察、医者が必要ないように、日本の森にはフォレスター(森林監督官)が必要だと思つた。

C.W.ニコル

「自然は人を癒し、健全な社会
そして子どもを育てる力をもつ」
仁坂 とくに、今の子供たちの心が寂しくなつてきている気がします。そういう子供たちが森や海、自然の中で暮していけば、本当に心が生き生きしてくるんじゃないんですかね。森の中の生活って歩くだけでもそんな簡単じゃないですよ。木の根っこはいっぱいあるし、下手をすると坂で転んでしまう。そういうところで身体と頭を使っていくことで、やっぱり心が生き生きしてくるんじゃないですかね。

私は昨年の夏までブルネイで大使をしていました。趣味が蝶の研究ですから、休みがあればブルネイの森に入りました。ブルネオのジャングルはいいですよ。いろいろな木が天高く伸びて、その樹冠から陽がところどころ地上に落ちてくる。きらきらと。しかし、めったに道がない。ブルネイの人々は森を恐れあまり入って行きたがりませんから歩く道がありません。道のない熱帯ジャングルに入るとあつという間に方向感覚がなくなります。ごくわずかにある、そういう道をよく歩いてはイノシシの尻に自分がひつかつたりしてしまいました。その点、日本の山はいいですね。どこにでも道がある。人々が山と森とともに暮している証拠ですよ。

ニコル 心が生き生きしてくると健康になる。それは直接国の経済に影響が出てきます。いま単純に「森の手入れは金にならない」というのは、ただの言い訳だと思いませんね。じゃあ森を放置するのかわか？川を放置するのかわか？山の中の不法投棄もやり放題にさせるのかわか？子供たちを放置するのかわか？全部同じ、だらしない心とつながっている。

仁坂 全く同感ですね。ちょっとね、日本もだらしのない心で起きていることが増えてきましたね。せめてこの和歌山はそういうだらしの

「これから必要なのは、
育成された担い手が持続して
仕事をしたいけるような
仕組みづくり」(仁坂吉伸)



和歌山県知事

仁坂吉伸

プロフィール
1950年、和歌山市生まれ
東京大学経済学部経済学科を卒業後、
通商産業省に入省。
2003年ブルネイ国大使を経て
2006年和歌山県知事に就任。



くじらの博物館
櫻井敬人 学芸員



の生き様の記録は、人類が未来の海、鯨とのつき合い方を考えるときに必ず参考になると思っ

太地は美しい町だ。今も自然の海岸線を多く残し、雄大な海が望める。燈明崎に立ち、かつてここで鯨と鯨捕り達の命をかけた物語が繰り広げられていたのかと感慨にふける。高校2年の時、C・W・ニコルの『勇魚』を読み、太地の荒海で巨大な鯨に鉢ひとつで挑んでいく古式捕鯨の世界に強く惹かれた。漁業者とついでに鯨捕りを歴史、文化人類学的に研究したいと思い、太地に近い三重大学そして名古屋大学大学院へ進学。研究のためアラスカ先住民の捕鯨キャンプで暮らしたこともある。その後アメリカ・マサチューセッツ州のニューベッドフォード捕鯨博物館でアシスタント学芸員を務めていたが、太地町からの要望で昨年10月くじらの博物館の学芸員に着任した。その頃、腹ビレを持つバンドウイルカが太地で発見され、その飼育・研究を担当するくじらの博物館が世界的にも注目を集めている。町に残る資料を集め、データベース化し、町の人々とともに、その貴重な文化を広く発信していきたいと思っ

海に魅せられて。

和歌山の海を語るには、そこに暮らす人を切り離して考えることはできない。外から来るもの、外に出て行くことが受け入れられる、そんな和歌山の風土が好きだ。三重の海の近くで育ち、小さい頃から水族館が好きだったが、フィールドワークがやりたくて長年勤めた鳥羽水族館を辞め、縁あってすさみ町に移住した。ここには地元の人々が気づいていない魅力がたくさん埋もれている。自分の培ってきた様々なノウハウを生かす最高の舞台だと思う。情報発信は誰でもできるが、人が何を知らたいかを迅速に把握し、その情報によるリアクションを直ちに次の情報発信につなげることができて初めて成功と言える。水族館はもちろん、広い意味では行政もサービス業のつだ。お客様の欲しているものを考えなければ意味がないし、お客様のクレームが次のアイデアを生む原動力となる。確かにエビとカニの水族館は小さいし、入館無料なので運営も厳しい。しかし、エビとカニに特化した水族館としては世界唯一だし、地元の漁師さんをはじめ、多くの人たちに支えられて、地域に密着した社会教育施設として機能している。すさみの海をテーマにした環境学習や町興しのお手伝いも大切な仕事だ。すさみ町に住んで11年になるが、良い意味で外の人間としての客観的な感性は失わないよう心がけている。そしてエビとカニの水族館は単なる観光施設に留めず、和歌山の海のPRの拠点として親しまれる存在にしていきたい。



すさみ町エビとカニの水族館
森拓也 館長

仁坂 そうですね。ニコルさんは、自然の営みを山から海まで自分の身体と頭で知っておられる。自然の大きな流れというか生態系が本当の意味で分かっていると思います。ところが分からなくて育った人が、けつこうたくさんいて、物事をものすごく単純化して考える。例えば自然の保護と経済成長は必ず相反するなどと考えてしまふ。かつてここ日本には、自然の恵みを余すところなく生かし、自然を侵し過ぎず折り合いをつけていく知恵と工夫がたくさんありました。手つかずの自然はそのまま保存すべきでしょう。でも私たちの周りには、長い年月人と共生してきた自然が多い。今、そこに人が手をかけない

と山の崩壊を起こす恐れがある。私は、環境保護と自然を活用した産業を両立させることが大切だと思っ

和歌山の海にはマグロの養殖やケンケン鯉漁、山にはみかんや柿といった果樹があります。さらに和歌山は海に囲まれた立地でもありますので、海を生かした観光振興にも力を入れていきたいと思っ

ニコル 私が子供のとき、五、六十年前です。ロンドンのテムズ川は臭くて死んでました。そして川岸はスラム化されてました。それではいけないと、テムズ川流域の二万箇所にもなる小さな小川や湧き水から浄化を進めていったんです。今では川にシャケが上って産卵し始めている。カワウソも戻った。そして川岸に緑が戻り健康になると、土地の値段がまた上っているんです。川に面した土地には、コンピュータソフト会社とかの工場とオフィスが建ち、お店や教会がまたにぎわっている。工場はあるけれど、七割くらいは緑です。トンボが飛んで鹿がいて鳥がいて蝶がいて。環境が良くなると、働く人たちの元氣と発想が良くなりますね。



これは経済のためにいいです。英国の経済が復活している大きな理由は、やっぱり自然の復活が大事だと分かっ

仁坂 はい、これから頑張っていくと思います。最後にひとつ。和歌山はかつて蟻の熊野詣と呼ばれたほど日本各地から老若男女が歩いて熊野を目指した地です。熊野信仰はやはり紀伊半島の自然の力と切り離せない。照葉樹林の山々と光輝く太平洋は、人間にエネルギーを与える力があると思うんです。高野・熊野が世界遺産として認められたのは、もう一度こうした力を発揮すべき時代が来ていると思っ

ニコル はい、待っているだけではダメです。だから私は、自然と人、自然と産業を結びつける仕掛けを考えています。セーリング競技用ナショナルトレーニング・センターの候補地に指定され、トップアスリートが和歌山の海で育っていくことも、農林水産業体験での学習によって、子どもたちの教育ひいては地域の振興にもつながっていくと思っ

仁坂 若者はひたむきに勉強して努力しなければならぬ。豊かな自然ときつちり向き合っていけば、きつとさきほどのだらしない心も吹き飛んでいくものと思っ

本日は貴重なご意見をどうもありがとうございました。